

闘病の光星投手・吉川さん 2日前死去

天国の仲間へ贈る1勝

仲間にごさげの1勝だった。第100回全国高校野球選手権で八学光星が初戦を突破した11日の2日前、同校野球部の吉川智行さん(2年)―東京都出身―が1年近くに及ぶ闘病の末、生涯を閉じた。教諭で野球部長の小坂貫志さん(40)は甲子園のベンチに持ち込んだバッグに、吉川さんの枕元にもあったお守りをしのばせた。決勝点は同じ投手として吉川さんをお守りがついていた中村優惟選手(3年)の一打から生まれた。(佐々木大輔、高松拓輝)【1面参照】

明石商を破り、甲子園のグラウンド上で笑顔を見せる八学学院光星ナイン。亡くなった吉川さんをお守りながらチーム一丸となって戦った

決勝点「彼が助けてくれた」

物静かな性格だったが、野球への情熱は強かった。敵しい練習の後に待ち受ける全体ランニングで、先輩に必死に食らいつこうとするひたむきな姿が、小坂さんの目に焼き付いている。「ボールが二つに見える」。2017年秋、1年生の吉川さんが異変を訴えた。病院を受診すると、脳に腫瘍が見つかった。入院した吉川さんへの面会はかなわず、小坂さんが会えたのは今年3月。吉川さんが光星の関東遠征に足を運んでくれた時だった。吉川さんは車いすに座り、離れた場所から練習試合の様子を見た。声があまり出ないようだったが、受け答えはできた。「仲間が甲子園に出ている姿を見たい」と言っていると、小坂さんは家族づてに聞いた。マネジャーたちは選手たち一人一人に配るお守りを、吉川さんの分も作っていた。ローマ字で「TOMOYUKI」と刺しゅうした。吉川さんは病室のベッドの枕元に、いつも置いていた。光星の甲子園出場が決ま

り、小坂さんは「テレビの前で応援してくれれば」と思いをはせていた。その矢先、訃報が届いた。初戦2日前の9日。ナインには翌10日の練習前に知らせた。4万3千人で埋まった甲子園。地元・兵庫県勢の明石商への応援と手拍子が渦巻く同点の8回、吉川さんを「かわいい後輩」と話す中村選手が登板した。延長10回2死一、二塁、中村選手に打席が回ってきた。投手起用で、途中出場の小坂が初打席。決して有利な状況とは言えなかった。「吉川のためにも頑張らないといけない」。5球目。思い切りバットを振り抜くと打球は三遊間へ。左翼手

が送球に手間取っている間に、走者が9点目を踏んだ。吉川さんの託した思いがある」。小坂さんはそう信じている。

た。「最後の1点は彼が手助けしてくれたと思う」。小坂さんはそう信じている。